

吉井勇の戦中疎開日記  
(上) — 「北陸日記」抄

細  
川  
光  
洋

【翻刻】

## 吉井勇の戦中疎開日記（上）——「北陸日記」抄

細川 光洋

二〇一七年の春、京都北山にリニューアル・オープンした京都府立京都学・歴史館（旧京都府立総合資料館）の吉井勇（一八六〇～一九六〇）資料には、戦時下の吉井勇日記として「洛東日録」「北陸日記」「續北陸日記」の三篇（ノート二冊）が残されている。これらの日記や手帖は長らく出納不可であったが、二〇一五年秋より研究目的での特別閲覧が認められている。これにより、稿者はご遺族と館との了解を得て、二〇一六年の「短歌研究」十一月号（吉井勇生誕一三〇年特集号）に「洛東日録」「續北陸日記」の一部を翻刻紹介した。しかし、誌面の関係もあり、八尾での疎開生活を記した「北陸日記」については、やむなく割愛せざるを得なかった。従って、「北陸日記」は本翻刻が初めての紹介となる。

吉井勇の戦時下の日記は、前述のように三篇からなり、B6判ノート二冊に縦書きでペン書きされている（題字は毛筆縦書き）。その内容及び執筆時期は次の通りである。

【洛東日録／北陸日記】 緑背ノート1（資料番号2455）

「洛東日録」京都岡崎円勝寺への移転から富山八尾に疎開するまでの記録（昭19・9・20～昭20・2・8）。

「北陸日記」常松寺仮寓期を中心とした八尾時代前半の

記録（昭20・2・9～6・23）

【續北陸日記】 茶背ノート2（資料番号2456）

「續北陸日記」契月居に仮寓した八尾時代後半から終戦を経て京都八幡の宝青庵に入居するまでの記録（昭20・6・23～10・26）。

八尾での疎開時代について、吉井勇は後年『私の履歴書』<sup>4</sup>で次のように語っている。

「疎開して行った先の越中八尾も、また安住の地ではなかった。私たちは二階の上まで雪に埋もれた北国の町に来て、宿屋や寺や友人の家や、落ちつくところもなく転々としていたが、そのうち雪が消えて春になると、今度は人情の酷薄に悩まされなければならなかった。／＼しかし、その間のことは、いまさらあらためて書きたくない。」

戦争末期の八尾疎開時代は、徳子前夫人の関係した「不良華族事件」に端を発する土佐流離時代（昭9・4～昭13・10）とともに、勇がその人生において最も苦汁を嘗めた時期である。この時期、勇は戦後に刊行された歌集『寒行』、『流離抄』に収められる多くの秀歌を詠んだ。しかし、勇自身が言葉を濁していることもあって、その歌の背景となる疎開生活の実態や各地を転々とした経緯・移転時期など

は、これまで知られていなかった。

今回、「北陸日記」「續北陸日記」を翻刻することで、その日記の記述より、各所への移転時期・仮寓期間が次のように明らかになった。作品の成立事情を考え、書簡資料との照合を行う上でも基軸となるものである。

【吉井勇 八尾仮寓先並びに期間一覽】

① 宮田旅館	昭和20・2・10	3・10
② 常松寺	昭和20・3・10	5・31
③ 小谷契月居	昭和20・5・31	8・22
④ 宮田旅館	昭和20・8・22	9・18
* 上洛(京都ホテル)	9・18	9・24
⑤ 宮田旅館	昭和20・9・24	10・5

※終戦  
※仮寓先決定  
※八尾を去る

歌人の戦中疎開日記としては、郷里山形上山かみのやまに疎開した齋籐茂吉の日記が知られている。茂吉の日記は、漢字カタカナ交じりの簡潔な口語文で記されている。これに対し、勇の日記は和漢混交の文語文による日記である。その記述は、時局の動向や日々の出来事の記録のみならず、作歌の覚え書き、読書の記録・感想、手紙の授受、交友関係や朝昼晩それぞれの献立にまで及んでいる。なかでも、いつものような歌をつくり、どの雑誌・新聞に送ったかという記録は重要である。その中には、多くの戦争詠も含まれている。勇の戦争詠は、戦後に編まれた歌集からことごとく削除され、その発表時期、発表媒体を含めて現在ほとんど知られていない。表だった結社を持たなかった勇は、戦後、茂吉や信綱ほど戦時中の歌についての批判を浴びることが

なかったとされるが、戦時下の勇を考える上で、こうした記述は今後の調査の手がかりとなるものである。

なお、今回の「北陸日記」の翻刻及び本稿執筆に関しては、ご遺族ならびに所蔵館と連絡を取り合いながら行った。日記には月ごとに適宜読解の助けとなるよう註を施し、併せて解題を附した。

表記について

本稿では、原則として原本の記載、形式をそのまま再現するように努めた。日付の囲み表示も、原本によるものである。

表記については以下の通りである。

- 一 漢字は、旧字体のものも含めて、可能な限り原本記載の通り表記する。
- 二 変体かな・合字は現行の表記に改める。
- 三 かな遣い、送りかな、拗音・促音の表記は原本記載の通りとする。ただし濁点がなく難読のおそれがある場合は濁点を補う。
- 四 おどり字は、漢字の場合「々」に統一するほか、原本記載の通りとする。
- 五 振りがな・傍点・傍線は原本記載の通りとする。
- 六 補いうる脱字並びに空白箇所は「」で補う。また、単純な誤字と思われるものには、を附す。
- 七 欄外記載は、各日の記述の後に〔右欄外〕〔左欄外〕として示す。勇の日記では欄外指示を概ね×で示しており、原本記載の通りとした。

八 解説ができない文字は□で示し、無理な推測は避けた。  
九 各日の日記は一続きの文章と見なし、追いつみとした。

翻刻

昭和二十年二月

九日 朝五時起。六時京都ホテルを出でて愈々北陸行の旅途に上る。京都驛にて待つこと約一時間、午前七時三十九分糸魚川行の列車に乗る。漸く座席を得たれども先日の如き不慮の事あらむかと思ひて心猶安らかならず。安土驛にて伊庭氏に會し預けありし鞆と好意の弁當を受取る。厚情感謝に堪へざるものあり。近江路の山白皚々。柳ヶ瀬あたり雪深く、猶飛雪の紛々たるを見る。少時午睡。覚めて伊庭氏より贈られたる行厨を開く。野草入りのすし。紅生姜、梅干等。一時間程延着して午后四時頃金沢着。大石氏に迎へられて雪中徒歩にて三竹屋といへる宿に投ず。炬燵の火乏しく旅愁しきりなり。北國新聞記者泉氏来り談話を求むれども多く語らず。七時過晩食、烏賊、鱈等。八時過就寢。夜半吹雪の音に夢を破らる。されど警報のなきことは何よりなり。

十日 八時過起。鞆二個風呂敷包一個を宿に預け、迎へに来れる大石氏と共に宿を出づ。汽車延着にて金沢驛にて待つこと一時間余。十二時頃の列車に乗る。守山にて大石氏と別る。この人器両小にして頼りにならず。車中午餐代りのパンを食し、一時過富山着。ホームにて待つこと約二時間。

午后三時十一分発高山線の列車に乗り換へ、四時頃漸く八尾着。五日京都の家を出でてより丁度六日目也。川崎、玉生、小谷、長谷川の諸氏に迎へられ、雪中用の護謨靴を借り、雪道を歩すること約卅分、川崎国手邸に着く。放庵命名の壺中庵にて関雪等の画帖などを見たる后同氏宅にて前記の諸氏に依る歓迎の晩餐。焼鳥、雉子うま煮、烏賊みそ焼、焼魚等。小酌の后手打蕎麥冷温一椀づつ。諸子のおはら節の合唱を聴き、骨董商キン鼓洞の奇談には腹の皮を撫ぶ。九時過諸氏に送られて宮田旅館に入る。この家の二階の奥の二間が當分の間吾等の埒也。積雪深きところ一丈六尺余と聴けば籠居のほか致し方なからむ。十時半頃就寢。四時頃まで前後不覚。久しぶりにて熟睡することを得たり。

十一日 八時起。疲労猶癒えざるものの如し。茫然たり。朝食后午前中は新聞を讀みて時を銷す。午后、炬燵にあたりつつ人生の轉變などを考ふ。川崎氏来訪。つづいて小谷氏も来る。夕刻青年学校に講演に来れる翁君雪にまみれて来る。東京の近状を語り慨然たり。翁君は晩食を共にしたる后提灯を携へ夜雪を踏んで富山に皈る。八時過就寢。

廿八日 床中歌をおもふ。八時起。歌をつくる。「高志消息」(川田順大人に)七首を京都新聞に送る。午前、高折夫妻に関雪氏逝去の弔詞とともに悼歌三首を送る。録一首「筆そそぐひといまはなく筆洗の水も氷となりたらずや」白井氏へ頒布會の頒價を申し送る。朝雪降りるたるも午頃霽る。谷崎君より来状。歌あり。録一首。「ただ頼む越路の山の雪とけて都にかへる春のたよりを」午餐、玉子入うど

ん。午后、「運命」を讀みつづく。豆餅を焼き三個を食す。今日は誰も来らず。宿の勘定を拂ふ。一泊二食付一人四円五十銭、午食一円二十銭、十八日分酒なども入れて二百二十二円とは頗る廉。茶代として百円を與ふ。夕刻「運命」讀了。更に「名和長年」「芦の一ふし」の二篇を讀む。晩食、鰯塩焼、茸ぬた、野菜汁。餅一個に蜂蜜をつけて食す。夜、九時頃寐に就かむとするところへ川崎氏来訪。再び起きて炬燵にて語る。「月明先人集」一部贈呈。十時頃再び就寝。熟睡。今日停車場近傍、速星、富山方面警戒警報出でたるも八尾町のみ何ごともなし。不思議といふべし。

\*1 先日のおき……勇夫妻は二月五日に京都から八尾疎開に向けて出発したが、途中警戒警報発令となり、安土で汽車が不通となった。仕方なく、安土村村長であった旧知の伊庭慎吉の許に荷物を預け、いったん京都へ引き返している。

\*2 伊庭氏……安土村村長で日本画家の伊庭慎吉。

\*3 川崎……勇の八尾疎開の受入れ人であった医師・川崎順二。越中民謡おわら保存会会長。

\*4 小谷……八尾の民謡詩人・小谷契月（恵太郎）。勇夫妻は五月三十一日〜八月二十二日まで契月居に身を寄せる。

\*5 翁……作家・翁久允。富山の郷土文化誌「高志」主宰。

\*6 「高志消息」……昭和二十年三月十一日の「京都新聞」に「高志消息 川田順大人に」七首が掲載されている。

\*7 関雪……日本画家・橋本関雪。昭和二十年二月二十六日没。享年六十一。歌集『寒行』では日記中の歌の上の句は「筆濯ぐ人もいまなく筆洗の」と改められている。

\*8 「運命」……幸田露伴の歴史小説。

\*9 「月明先人集」……吉井勇歌集。昭和十九年三月、草木屋出版刊（限定二百部）。木活字による歌文集、監修山崎斌。

#### 【八尾疎開 宮田旅館籠居】

「北陸日記」ノートの前半に記された「洛東日録」には、昭和二十年一月十六日夜半の東山馬町空襲の後、緊迫した記述がつづく。同月十七日には「昨夜の爆撃は五條阪なるよし。いよいよ京洛も修羅の巷か」、翌十八日には、「いよいよ戦禍身近に迫るの感あり」とあり、二十二日夜に孝子夫人と疎開の可否について語り合ったことが記されている。

京都には連日のように空襲警報が発令され、一月二十四日、勇はついに疎開を決意し、「富山縣八尾の川崎氏に依頼の速達」を送る。富山には、前年の秋の越中加賀行（昭19・10・11〜14）の折りに翁久允らの招きで訪れており、八尾の川崎順二（八九〜一九二〇）ともこの時面識を得ていた。川崎は当時越中民謡おわら保存会の会長をしており、勇の友人である小杉放庵、川田順とも親交があった。

やつとの思いで雪深い八尾に入ったものの、戦争末期のことであって仮寓先はなかなか見つからず、勇夫妻は宮田旅館に三月十日までの一と月の間足止めされる。雪国の暮らしは勇にとつて目新しく、宮田旅館で目にした「雪流し」の情景なども印象深く記している（二十二日）。

歌集『寒行』の「北陸雪中吟」に宮田旅館での籠居の日々を詠んだ歌が収められている。旅籠屋の古看板に吹雪して飛驒街道をゆくひともし

如月の越はたごの旅籠かるとの古炬燵ふるこた雪にこもりてあらむわが身か  
 宮田旅館は現在も営業を続けており、宿の玄関には右の  
 一首目「旅籠屋の」の吉井勇歌碑が建てられている。宮田  
 旅館は女優柴田理恵の生家で、母須美子は滞在中の勇に歌  
 を教わったこともあったという。

## 昭和二十年三月

二日 八時起。曇。南風烈し。雪解の涓滴の音絶えず。雨も  
 烈し。午前、手紙数通を書きたる后郵便局にゆく。安田生  
 命に保険金（六二）払込。井の本君に送金。川崎氏を訪ひ  
 火鉢の傍にて閑談。轉出証明書を渡す。讀了の本を返し、  
 更に新しき本を借用。新聞を見るに、硫黄島の皇軍勇戦中  
 なる由。敵兵殺傷一萬三千、敵艦船撃沈破五十二隻、戦車  
 炎上二百廿六。されど敵の侵入を阻止するによしなく、前  
 途甚憂ふべきに似たり。戸倒れて窓の硝子を破る。風吹き  
 入りて寒し。落莫たり。午食遅く二時半。烏賊黒づくり、  
 豆腐汁。午后、小谷氏来訪。配給の件にて役場に往きてく  
 る由。いろいろとこの土地の人は深切也。露伴の「風流  
 微塵藏」を讀みつぐ。今日は終日風雨にて雪見る見る消ゆ。  
 晩食、豆腐みそ汁、鰯塩焼、おろし合へ。餅二個、蜂蜜を  
 つけて食ふ。夜、森於菟氏の「解剖臺に凭りて」を讀む。  
 父鷗外を語る文なつかし。九時過就寢。涓滴の音喧しく、  
 夢半ばにして覚む。

三日 八時起。床中歌をおもふ。今日も雨。雪解の音頻りな  
 り。午前、歌を作る。「大通信」のために「八幡詣」五首。  
 朝食遅くして十時。去月七日出の川崎氏の京都宛速達、漸  
 く今日回送し来る。通信の懈怠驚くべし。「文藝日本」を  
 見るに、浅野、房内などといへる徒輩、わがもの顔に歌を  
 論ず。之等便乗の徒輩唾棄すべし。予は今后この雑誌に歌  
 を寄するを欲せず。午ちかく、小谷氏来訪。配給のこと明  
 日あたり通帳出来る由。餅を貰ふ。午食、山芋酢、うどん  
 入味噌汁。午后、小谷氏再び来訪。烏賊、銀鯛持参。昨夜  
 漁りたるものなりといふ。岡本かの子の「鶴は病みき」を  
 讀み、芥川龍之介をおもふ。小谷氏より便あり、焼き立て  
 の今川焼を貰ふ。今日は小谷君の好意による口福多し。噓  
 出でやや風邪気味。武鑑氏の詠草に加筆。進境著し。晩食、  
 銀鯛照焼、芋味噌汁、烏賊さしみ。今川焼二個。夜、川崎、  
 小谷両氏来訪。相談の後家の話にゆく。九時過両氏再び来  
 訪。常松寺の離座敷（十疊六疊二間）に決定したる由。日  
 もよし、座敷もよし、「あきない酒」飲まうといふことに  
 なり、小谷氏酒と肴を持参。夜半迄鼎座して飲む。就寢し  
 たるは一時に近し。

四日 八時起。漸く晴れたれど寒し。午前、揮毫をつぐ。  
 「寂しければ」「浄土寺」廿五枚。十一時近く高折夫人依  
 頼の分百五十枚全部書了。北陸銀行に寄りたる后川崎氏を  
 訪ひ冷酒一杯を飲む。はじめて川崎氏の描ける屏風繪を見  
 る。中々佳作也。飯れば高岡□魚洞の大坪氏あり。小包を  
 届け来る。午食を共にす。鰻葱煮もの、酢のもの。午后、

孝子と共に常松寺を訪ひたる后川崎氏を再訪。玉生、小谷氏と共に再び常松寺にゆく。荒廢せる法華寺にして借るべき離房は障子張替中。雪深くして暗けれど雪除すればよからん。但し何處となく黙阿彌ものを思はするものあり。金鼓洞等雪掻きにつとむ。明日移居のことに話を極め四時頃飯宿。夕刻、小谷氏来訪。どびろく持参。八日目にて風呂湧きたれば入浴。湯加減よく快し。千代田より電報。母上疎開の希望あり、八尾適せるや否やを問ひ来る。電文簡にして返事に惑ふ。晩食、鰯刺身、鯖塩焼、味噌汁。どびろく二杯。夜無為。催眠劑を嚙み九時頃床に入りしも眠浅し。

**十日** 七時起。昨夜降りたりと見え雪積れり。手紙を書く。午前、雪再び降り出で凍てて寒し。千代田へ手紙、この地の状態を告げ母上疎開の判断を任す。荷物をつくり移居の支度をはじめ。午ごろ高折夫人の使ひ田中氏来る。短冊百五十枚を渡し、松園の繪を矢倉君まで届けることを依頼。午食の後勘定を済まして宮田旅館を出づ。去月十日より丁度一ヶ月間の旅宿生活なりき。東町常松寺に至るに猶片付け中。十疊、六疊の二間。積雪軒を越えたれば晝猶暗く、電燈の光に頼らざるを得ず。流離の感いとど深し。川崎、小谷、玉生、金鼓洞等来り、眞情こもれる世話になる。爐を切り櫓を掛け籠居の体裁漸く整ひ来る。夜、八時頃より轉居祝ひとして六疊の座敷にて小宴。小谷氏齋らすところの山鳥の水焚きにて、酒一升、どびろく一升を傾く。集まるもの前記の諸氏にして十二時過散會。川崎氏より届け来る井飯を、海苔と鯉節にて食したる后一時近く就寢。眠深からず。便所他の同居人と一緒にして縁を通ふ寢音うる

さし。

**十一日** 八時過ぎ起。漸く居定まれども、荷物雑然として猶旅にあるがごとし。火を得るまでに時余を費す。十一時近く餅を焼きて五個を食す。鞆を机として手紙を書く。積雪のため屋外を見がたく晴曇不明。炬燵にあたりて白鳥の「微光」「徒勞」「泥人形」などを讀む。眠り足らず懶し。午后、小谷氏来訪。味噌、徳利、配りもののハンケチ等持参。少時閑談。久しぶりに一九の「膝栗毛」を讀む。夕刻、富山の表具や佐幸、野崎の両氏来る。菓子、花などをもらふ。晩食、昨夜の山鳥鍋に米と餅を投じて雑炊をつくる。中々うまし。四杯。夜、彌次郎兵衛喜多人に親しむ。烏賊の句を戯れにつくる。「千鳥賊を裂いて遊里の酒さむし」催眠劑を嚙みて九時近く就寢。よく眠る。今日は新聞を見ず。

**十三日** 夜半二時半頃目覚めたる后は、彼を思ひ之を思ひて眠り難し。明日をも知れぬ命といふ感いとど切なり。八時起。除雪人夫二名来る。質実なる男にて窓外の除雪大に捲り、電燈の光も不要となる。十時過例に依り朝午兼ねたる食事として雑煮四杯。手紙数通を書く。近所への挨拶としてハンケチ三枚づつ。班長その外七軒。今日はそのうち四軒を済ます。午后、小谷氏来訪。鹿子木不倒の馬の繪持参。借用して床に掲ぐ。名古屋の爆撃にて熱田神宮炎上せる由。東京の惨状は往年の大震災に数倍するものありといふ。孝子川崎氏へゆく。三時半頃玉生氏新酒を携へて来訪。ともに銭湯鏡湯にゆく。主人新井氏に會ふ。班長にして池の坊の花の師匠。入浴して飯宅。暫く炬燵を囲んで玉生、小谷

両氏と語る。夜七時頃川崎氏来訪。閑談の後「短歌歳時記」を贈る。晩食八時頃、例に依り海苔、鯉節。酒小酌。九時過就寢。

\* 1 浅野、房内……小説家・浅野晃、歌人・独文学者・房内幸成。「文藝日本」昭和二十年三月陽春号に、昭和天皇の御製をもとにした房内の長歌「御製を拜誦して」、浅野の「谷の白梅―二人の指導者に就いて―」が掲載されている。

\* 2 千代田……勇の四弟・吉井千代田。

\* 3 矢倉君……矢倉年。甲鳥書林、養徳社の編集者。勇は甲鳥書林より、歌集『天彦』『定本吉井勇歌集』等を刊行。

\* 4 東京の惨状……勇が常松寺へ移転仮寓した三月十日は、B 29による東京大空襲のあった日である。

## 昭和二十年四月

六日 夜半二時頃始めて八尾のサイレンを聴く。警戒警報。間もなく解除。八時起床。晴曇定まらず。寒し。五守君依頼の箱書三。八時半頃五守君来る。雑談をしつつ朝食。午前、小谷君来訪。五守君の鉄道証明書を頼む。五守君十二時頃富山へ一泊の後飯田すとて去る。午后、一時頃午食として味噌雑炊二杯。この日魚の配給あり。鱈一尾。新聞を見るに、昨日小磯内閣総辞職の由。歴代の内閣無責任なること驚くべし。国民を愚弄し、国家を危殆に陥らしむ。死もその罪を滅すべからず。今后辞任を許さず、屠腹せしめては

如何。独り沈思して慨然たり。小谷氏再び来訪。牛肉を貰ふ。三時過ぎ鏡湯にゆく。疎開学童とともに入浴。孝子は山にゆきて薪を拾ひ来る。晩食、牛肉バター焼、混成酒小酌。夜、九時頃就寢。眠浅く屡目覚む。

七日 八時過起。晴れたれど寒。薄氷張る。九時過警戒警報。又サイレン故障ありと見え半鐘を鳴らす。恰も火事の如し。午前、小谷氏来る。日蘇和平條約話まとまらず、一年后には効力を失ふ由を傳ふ。家のことに就ても内談あり。郵便局、北陸銀行にゆきたる后川崎氏を訪ふ。本を借りて飯る。午后、孝子と二人散歩に出づ。卯の花村方面。谷井氏を訪ひ閑談。村島西一氏の紅白梅の六曲一双を見る。麥湯一杯を喫したる后落の臺など採りて四時頃飯宅。久しぶりに探偵小説を読む。夕刻小谷氏再訪。玉堂の俳句画賛「瓜生や」を贈る。晩食、牛肉大根馬鈴薯うま煮。夜、小谷氏三たび来訪。焼酎持参。九時過川崎氏玉生、上村、野崎の諸氏を伴ひて来訪。上村氏よりいろいろ京都の近状を聴く。爆弾も三四个落ちたる由。かき餅を焼く。十一時過客散じて后就寢。よく眠る。

八日 曇りて寒し。床中限定版の和紙本のことなど考ふ。「越客叢書」とし第一巻「高志消息」第二巻「八尾百首 續八尾百首」第三巻「玄冬抄」などを予定。部数二百部。歌の数毎巻二百首位。九時起床。十時過牛肉大根のうま煮にて朝午兼ねたる食事。手紙を書く。千代田より来信。母上二日に江州塚本氏に疎開されたりといふ。午后、二時近く茶漬二杯を露の臺にて食す。小谷氏の令息炭一俵を届け来る。今朝より少しく鼻風邪の気味。三時頃より孝子と共に散歩

に出づ。山吹橋を渡り高熊方面を歩みたる后、打合橋を渡りて小谷氏宅を訪ふ。天麩羅、鱈等にて一酌の后天どんの馳走になり七時過飯寓。新聞を見るに、昨日鈴木内閣成立したる由。海南先生情報局総裁。概してこの内閣迫力なし。皇国の前途憂ふるに堪へたり。九時頃催眠薬を用ゐて就寢。

【十八日】床中警報のサイレンを聴く。六時二十分。間もなく解除。八時半頃起。昨夜より腰痛殆んどよし。今日も快晴。午前、手紙を書く。十時過朝午を兼ねたる食事。焼豆腐と豆腐味噌汁。小谷氏来訪。鱈を食ひに往かむと言ひゐたる四方大火の由。新聞を見るに鞍馬寺も本堂よりの失火にて炎上。沖繩の戦果も轟撃沈破四百隻に近し。今日は焼豆腐の配給あり。午后、茂吉の「子規」を読む。小谷氏の家に近き松根油の工場に小火あり。見舞にゆく途上にて小谷氏に會ふ。今夜蟾蜍のつけ焼にて一酌せむとのこと。夕刻川崎氏来訪。夜、七時頃川崎、小谷両氏来訪、晩食を共にす。蟾蜍のつけ焼は恰も鶏肉の如く割にうまし。ぜんまい、蕪、焼豆腐、豆腐味噌汁等にて小酌。九時過就寢。夢半ばにして覚む。この日養徳社上村氏より来状。「玄冬」以後の新歌集出したきゆゑ企劃届至急送れとのこと。題名をいろいろ考へたる末「寒行」と決定。風烈し。

【廿七日】八時起。曇。午前、「寒行」の編輯にかかる。午前中に約六分の一を了ふ。午后、編輯をつづく。一時頃午食代りにかき餅数個。臥讀少時。村島西一君来訪。富山出身

の画家にして角間梅林中に疎開し来れる人。陸軍少尉の由にて軍服なり。火鉢の傍にて二時間程閑談。玉堂、大雅堂の話など出づ。雷雨来り室内遽かに暗し。小谷氏内宝来り孝子と語る。風呂屋の老女牛蒡持参。夕刻再び編輯。晩食、螢鳥賊うま煮。にしん煮付。このにしん質よくてうまし。夜「蜀山人の研究」を読む。體痒きゆゑシヤツを検したるに子虱三匹を発見。直ちに猿股まで脱去。落魄虱を生ずるに至りたるかと情なし。多分銭湯にて得たるものならん歟。九時過就寢したるも気味悪く寐付かれず。

〔右欄外〕×和泉やの公婦小照来る。芋持参。孝子珊瑚珠を與ふ。野菜物豊富となる。

\* 1 五守君……松任（現石川県白山市）の篆刻家・富田五守。

\* 2 海南先生……政治家・歌人の下村宏（海南）。

\* 3 「寒行」……歌集『寒行』昭和二十一年十月、養徳社刊。歌数六七三首。昭和十八年十一月から同二十年四月までの作品を収める。

\* 4 「蜀山人の研究」……玉林晴朗『蜀山人の研究』昭和十九年六月、畝傍書房刊。

\* 5 公婦……「北陸日記」二月十二日に、「この町には藝者猶在り、公婦と称する由」の記述がある。

【常松寺仮寓1 歌集『寒行』】

三月十日、一と月に及んだ旅籠暮らしを終え、勇夫妻は宮田旅館から仮寓先である常松寺に移る。常松寺は法華宗陣門流の寺で、川崎氏の口利きによりその離れの二間（十

畳と六畳)を勇は借り受けた。「黙阿彌ものを思はするものあり」とあるように、荒廃した趣の離房であったようだ。

ようやく仮寓先は見つかったものの、常松寺での生活は勇にとって不如意なものだった。本堂は夜ごと女学生たちの溜まり場となつて騒がしく、寺の離れを間借りしていることもあつて、たびたび葬儀のために勇夫妻は居室を空け渡すことを求められた。八尾時代の唯一の温泉旅である徒歩での山田温泉行(三月二十七日〜二十八日、玄猿楼泊)も、前日に寺から座敷を一日空けるようにいわれて急遽思い立ったものである。

四月に入ると、八尾にも空襲警報が発令されるようになった。食糧事情も次第に厳しさを増し、朝午を兼ねた食事の日が目立つてくる。十八日の「蟾蜍ひきがね」も当時の代用食として食されたものである。「落魄風を生ずるに至りたるか」という感慨が当時の心中を物語る。

この四月で特に注目したいのは、歌集『寒行』の題を決定し、その編輯に着手していることだ。勇は『寒行』の編輯に四月二十七日に取りかかり、五月七日に一通りの作業を了えている。従つて、『寒行』は八尾疎開時代の中でも最も流竄の感の深い常松寺仮寓の期間に編まれた歌集であるといえる。五月七日の日記には、「午前、「寒行」の編輯を了す。(後残れるはルビと小序のみ)歌の数八百五十三首。予定より百五十首増加せり。内容は「玄冬」よりもよく「天彦」に次ぐものか。やや自信あり」とある。

歌集『寒行』の「後記」には、「思へばこの間予は安住の地を得るに惑ひ、京洛に在りても北白川より岡崎へ居を

移して、更に戦禍の及ばむことを惧れては、遠く北陸の辺陲に奔竄して、そぞろに流離の苦を嘗めたり。かくして一身の変転を顧る時、この歌集に対して覚ゆる作者としての感慨は、到底他のものと同じからず、むしろ愴然として長く見るに堪へざらむとす。」と記されている。常松寺での日記は、この「後記」に述べられた感慨を裏づけるものであろう。

『寒行』「僧坊にて」に、當時を詠んだ歌がある。

夜よるごとに寒きひびきをつたへ来る雨漏り受けの盥たらひわびし  
 涅槃ねはん會えも近しといふに風さむくなほ丈餘またある窗まどの外との雪

## 昭和二十年五月

一日 夜半より風吹き出で温。八時頃より雨降り出でたるもやがて止む。めづらしく今日は七時過起。午前、「寒行」の編輯のつづき。既に五百首を了す。川崎氏を訪ひたるも多忙の様子ゆゑそのまま皈る。組合に寄りて小谷氏に會しともに仮寓。蕎麥がきを饗し、居所の件依頼。大体小谷氏宅に移ることに話極まる。近衛公軽井沢より来信。午后、一日なれば吉例に依り諏訪神社に詣でて祈願。孝子は下駄の鼻緒つくり。歌集の編輯をつづけて夕刻に至る。新聞を見るに沖繩の戦況やや好轉せるものの如く、撃沈破五百隻に近し。独逸は伯林を大部分占領され断末魔。ムソソリニ

は逮捕されたりといふ。樞軸陣悲風落莫たり。晩食、三つ葉入厚玉子焼、馬鈴薯うま煮。夜、「蜀山人の研究」を讀む。小谷氏再び来訪。家人と相談予等を迎ふることに決したる由。大体五日に移ることに決定。夜に入りて雨降り出づ。蕎麥がきを食し、手紙など書く。十時過就寢。

**二日** 雨止まず。滴瀝の音ものうし。新聞を見るに、ムツリニ処刑され、独逸降伏せるもの如し。日本もいかになりゆくらむと心細し。鬱々として床中に在り。十時起。「寒行」の編輯にかゝりたるも筆進まず。「蜀山人の研究」を讀む。午后、小谷氏来訪。家の伴川崎氏に異議ありて、小谷氏宅へ移ることは見込なきもの如し。今夕猶よく相談するとのことなり。流離の身なれば何ごともなりゆきに任するより外致し方なし。薄暗き部屋にてひとり抹茶二椀を飲む。憂鬱なれば一酌を欲し、玉生氏へ孝子を遣り一陶を乞はしむ。玉生氏病臥。女中一升罎を届け来る。(代金八円也)「寒行」の歌数六百首を越す。七百首あれば可ならん。夕刻、蕎麥がきを食す。夜、焦燥。誰も来らず。家のこと如何になりしやら分らず。晩食九時過ぎ。あさつき酢味噌、山芋とろろ、などにて一酌。十時過ぎ就寢したるも眠りがたし。家のこと予の意志を認めざることに於て憤懣禁じがたし。

〔左欄外〕×十時頃警戒警報出でたるも間もなく解除、飛驒高山辺まで敵機来れるなりと。

**三日** 七時起。半晴半曇。直ちに家を出で城ヶ山に登りたる后井田川の岸辺を歩み八時過飯寓。新聞を見るに、ヒットラー陣中に死せる由。予は不図この男狂人にあらずやとの

感を起せり。午前、「寒行」の編輯に従ふ。寒ければ再び炬燵す。午后、中根といへる歌をつくる青年来れるも會はず。三時頃又蕎麥がきを食す。「蜀山人の研究」讀了。徳川時代の文人生活は羨望するに堪へたり。「寒行」の編輯を大体了る。七章六百九十首程なれど、結局七百五十首位にならん。小照来る。玉子十個を貰ふ。夕刻、小谷氏令妹来訪。油揚芋の煮べを貰ふ。晩食、遅くして八時に近し。長万より仕出しを取寄す。平目刺身、オムレツ、数の子、平目筍椎茸のうま煮等にて佳肴多し。小酌。孝子歌をつくる。九時過就寢。熟睡。

**四日** 晴。七時起。新聞を携へて散歩にゆく。伯林陥落、獨逸軍降伏、ゲツベルス自殺等。形勢日本に非なることのみ。城ヶ山を越えて小谷氏を訪ひ用談。八時過飯寓して朝食。午前、孝子堀氏の老女と山へゆく。「寒行」の編輯をつづく。「高志消息」を除き、「鑑賞余響」を入ることにす。小谷氏来訪。今日中に家賃その他を極むる由。居所の方針はその後に考究すべし。石田元季氏の「俳文学論考」を讀む。午后、小谷氏再び来訪。寺の和尚来らぬため家賃極めがたしとのこと。なりゆきに任すより外なし。二時過孝子蔵、ぜんまい、かたくり、蓴、等を携へて飯寓。午食の後鏡湯にゆく。初湯にて男湯は予一人なりき。飯りて川崎氏を訪ふ。家のことの話出でず、予もそのままにして飯る。「寒行」の編輯。七時頃晩食、味噌胡瓜、蓴、片栗胡麻あへ、鮓等。小酌。夜、秋路君来る。蔵を貰ふ。九時過就寢したるも眠れず、夜半三時頃漸く浅き眠りに落つ。

**五日** 七時頃起。昨夜の風雨漸く霽れむとす。起きて直ちに

小谷氏を訪ふ。昨夜川崎氏小谷氏寺の和尚に會ひ家賃を三十五円と極めたる由。先づこの辺穩當なるべし。これにて結局この俗寺に住居せざるを得ざることとなれり。致し方なし。味噌汁と焼鯖にて朝食の馳走になり九時頃飯寓。湯川博士より揮毫の禮として紙を送り来る。眠り足らず頭重し。午前、手紙を書く。天候猶險悪。「寒行」の編輯を大體了す。歌の数八百首。猶増減あらむ。午后、天漸く晴れたれど風強し。孝子小谷氏方へ遊びにゆき沢庵を貰ひて二時頃飯る。午食代りにうどんを食す。郵便局へゆき矢倉氏へ打電。販りて「俳文学論考」を読む。つづいて長塚節の「隣室の客」を読む。秋路君より使ひにて箭を届け来る。夕刻、川崎氏來訪。遂に予が意のあるところを解せず。神經の粗大驚くべし。晩食、長万の料理來らず、あまご一尾、蟹一足を寄越せるのみ。うで玉子。一酌。夜、九時過就寢。熟睡。

**十二日** 五時頃目覚む。昨夜は熱ありしものの如く寐間着汗ばむ。七時の熱は七度三分。八時頃小谷氏來訪。薬を貰ふ。居所の件について話あり。上圍時瓦斯のみ出でたる后小量の出血あり。正午の熱七度五分。午后、警戒警報出でたるも間もなく解除。四時頃小谷氏再來、螢鳥賊を貰ふ。今日は秋霖の如き雨降りて寒し。五時の熱七度七分。夕刻孝子矢倉君を迎ひに停車場にゆく。夜に入りて八時頃矢倉君来る。病臥中會飲出來ざるは遺憾に堪へず。京都の話をいろいろ聴く。昨朝京都郊外の太秦、淀に敵襲あり、市内に二三個所投彈ありたる由。「定本」の出来上り又々延期、六

月廿日迄には世に出る筈とのこと。預けありし荷物を受取る。塩鯖を一尾貰ふ。小さきものなるが二十円也といふ。世はいよいよ末世也。和泉や及び宮田より取り寄せたる料理にて晩食を餐す。酒も四合ほどあり。この夜生憎本堂に屍体を持ち込んで通夜あり。迷惑甚し。いよいよここを去らざるべからず。十時頃孝子は矢倉君を送りて宮田にゆく。十時の熱は六度四分。眠らむとすれど本堂の死人気になりて眠れず。今日も予の食事は前日に全し。

〔右欄外〕×京都の闇相場次のごとし——玉子最高三・五〇、夏みかん四、五〇、鶏一六〇・五〇 鯖一尺ほどのもの三五・〇〇、酒一升一三〇・〇〇 米一升四〇・〇〇 生姜糖二寸角位一・八〇等

**十三日** 五時頃目覚む。七時の熱七度。八時過矢倉君来る。この日陰鬱なる天気。十時頃孝子矢倉君を送りて停車場へゆく。千葉の父へ送るべき短冊と蕎麥粉を矢倉君に托す。十二時頃孝子飯寓。矢倉君無事に出発したる由。正午の熱六度八分。午后、川崎国手今日にて三日來らず。不快甚し。八尾に來りしを悔うるの念しきりに起る。村島夫人入口まで來り牡丹餅を届く。夕刻又々和尚來り、明朝九時より奥座敷開けよとのこと。いよいよ辛抱成し難く、直ちに宮田旅館へ移る。五時の熱七度二分。催眠薬を嚙み八時過眠らむとす。川崎国手より電話ありたるも断る。蓋し憤懣の情に堪へざればなり。食事前同断。

**十四日** 三時頃熟睡。その後も又昏々たり。朝六時頃上圍のため常松寺に赴く。軟便少量。七時の熱六度三分。午前、露伴の「頼朝」を読む。秋路君來る。紙の材料を以て作れ

る繪を見せられたれど感心せず。正午の熱、六度四分。午后、小谷君来りやはり寺なれど日當りよき二階見當れりといふ。孝子を見せにやる。略決定。四時頃飯寓。五時の熱六度五分。水のごとき下痢便あり。夜、七時頃突然小杉放庵君来る。川崎、玉生両氏同伴。石に歌の賛ある繪を貰ふ。折角の友来れるに病臥中にて遺憾至極。しかしこれも運命なれば致し方なからむ。九時頃眠る。今夜も本堂にて法華經三昧。太鼓の音枕にひびきてうるさし。飛んだところに居を定めしものかな。されど今夜は熟睡せり。食事全断。

**十五日** 五時目覚む。心気漸く爽然たり。幸ひ疑懼せるがごとき病氣にてはなかりしもの如し。七時の体温六度六分。久しぶりにて髯を剃る。午前中、臥床せるまま半眠半醒。今日は曇りてやや寒し。本堂の騒ぎ漸く止む。昨夜は遺骨の前にて妻妾の争論ありたる由。正午の熱六度六分。午后「頼朝」を読む。四時過放庵君小谷氏とともに来訪。小杉氏は今度の寺の二階は陰氣にて駄目、小谷氏の奥座敷可ならんといふ。玉生、川崎、谷井氏等来訪。住居の話いろいろ出づ。川崎氏も我意を撤したる様子なれば近く新居定まるならん。五時の熱五度九分、十時の熱五度八分。夜一時半頃眠りを成さず、起きて催眠薬を嚙みて再寐。されば僅かに一二時間眠りしのみ。食事前日に同じ。夜に入りて大雨となる。

**十六日** 五時目覚む。小杉君今朝出発とのことにつき、六時頃川崎氏を訪ひたるも延期の由。飯りて再寐。八時過起きて床拂ひす。食事も玉子、おまじり等を用う。午前、日記の整理と手紙とに時を銷す。午ごろ川崎氏を訪ひ、放庵君

と語ること時余。大觀と閑雪と酔ふて接吻せりといふ奇談などを聴く。飯りて午食、梅干にておまじり三椀。午后、書を讀まむと欲すれど何となく落ちつかず。昨夜眠り足らざれば頭重し。夕刻、小谷氏来訪。結局小谷氏宅の座敷を借りることに決定。移居の期日は追つて相談することにす。今日の熱は五時六度二分。晚食、梅干にておまじり三椀、卵黄二個入りスープ。夜、ユーゴの「九十三年」を讀む。九時過熱を量りしに五度八分。(平熱になりたれば明日より熱を記さず) 十時頃就蓐。今夜はよく眠る。

**廿五日** 深更十二時半頃空襲警報出づ。投弾せるらしき音一回。三時近く解除。それ等のために眠浅し。八時前起。床中少しく歌をつくる。今日も快晴にして温。九時頃朝食、生玉子、山うど胡麻あへ等。午前、桑野氏詠草に加筆。孝子は鏡湯主人新井氏の歡送にゆく。新聞を見るに、昨夜又もやB 29二百五十機帝都を空襲、宮城、赤阪離宮、東久邇、北白川、伏見の三宮家、泉岳寺なども焼けたる由。空しく魔翼の跳梁に任ずとは何たることぞ。為政者の無為痛憤に堪へず。午后、一時頃午食。矢倉氏より貰ひたる二十円の塩鯖半分、即ち十円分、鯡塩焼。昨夜の空襲は伏木に機雷、笹津に爆弾を投下せりといふ。孝子と散歩に出づ。秋路氏へ寄り紙漉場を見たる后三時過飯寓。歌をつくる。正岡の「續寄席風俗」序歌五首。始めて庵名に「蓬々亭」を用う。晚食、露筍うま煮、湯豆腐にて焼酎酒小酌。微酔。夜、玉生氏より貰ひたる粉しやぼんは如何もはつたの粉に違ひなしといふことになり、蜂蜜を入れ麥こがしとして食ふ。

石鹼を食べたるは始めてなりと一笑。九時頃就蓐。

**廿六日** 深更十二時過頃又もや空襲警報ありたるも間もなく解除。そろそろこのあたりも危険状態に入れるもののごとし。七時半起。今日も快晴。午前、小谷氏来訪。今月中に全氏宅へ移ることに決定、これより川崎氏の諒解を求むる由。部屋代などといはず家族的に居住せられたしとのことゆゑ、繪か何かにて禮せむと思ふ。廣瀬氏の詠草に加筆。矢倉氏依頼の箱書三点を揮毫。玉生氏来訪。馬鈴薯を貰ふ。粉しやぼんとはつたいの粉と間違へたる話をして大に笑ふ。午ごろの午食として茶漬二杯。午后、十二時半頃警戒警報出づ。直ちに解除。久しぶりに郵便局にゆく。販りて臥讀。鷗外の「阿部一族」「山椒大夫」「古い手帖から」讀了。夕刻玉生氏来る。混成酒と石鹼を貰ふ。晩食、粕汁、螢烏賊うま煮。混成酒（焼酎、味淋、ブランデー、葡萄酒）一杯。夜、「九十三年」讀了。柳田氏の「雪国の民俗」を讀む。秋路君ちよつと来訪。八時半頃寐。

**廿八日** 五時頃目覚め床中歌をつくる。七時半起。今日も晴。久しぶりに散歩。城ヶ山に登り若宮八幡に詣でて販る。朝食、鰯、小豆と芋の味噌汁。午前、手紙を書く。小谷氏来訪。家のこと川崎氏に話したるに猶我意を立つる由。この男少し愛想が盡きたり。昨日より鷗外の「即興詩人」を讀み始む。少年時代この書を耽讀したる頃のことを思ひて懐旧の情に堪へざるものあり。午后、一時頃午食、鯉にて飯二椀。玉生氏来訪。磧にて川魚狩をするゆゑ来らぬかとの招待なり。諾。郵便局にゆきたる后孝子と共に川崎氏を訪

ひ、玉生氏及び令息と共に十三石橋の川下の磧に至る。投網を打つ数回。一回捕ふるところ概ね数尾。藁の円座を敷き石を膳として小宴。うぐひ焼魚、全味噌汁、孝子持参の煤竹味噌煮等。村島画伯、谷井君も来り加はり、漁師と合せて九人。酒三升を傾け、数尾づつの土産を提げて八時頃飯寓。晩食、玉子二個を煮て、飯三椀。小谷氏来訪。明日川崎氏に話して家のこと取り極めむといふ。川崎氏の我儘には予も小谷氏も全く手古摺り果てたり。うぐひ二尾を小谷氏に贈り、十一時頃就蓐。まづよく睡りたる方か。

**三十日** 半晴半曇。七時起。「蓬廬聯吟」の歌をつくる。「流離三昧」「鼠の歌」「貧厨抄」を了り、今度は「放庵来」。午前、「宝島」を讀む。午睡少時。新聞を見るに、B 29 五百機横濱、川崎に来襲せる由。午后、籠居うた作りにつとむ。小谷氏来訪。川崎氏説得功を奏し、漸く承諾を得たる由。明日移轉に決す。厚情謝するに堪へたり。晩食、海苔。夜、川崎氏を訪ひたるも不在。更に小谷氏を訪ひ明日の打ち合せをしたる后小酌。「空白」なるものを飲む。どぶろくを精白にしたる如きもの。酒精度かなり強し。十時頃辞去。途中秋路君に會ふ。販りて寺の和尚に移轉の旨を告げて承諾を得たり。十一時過就蓐。快夢を見る。

**卅一日** 六時起。快晴、温し。八時頃移轉の人夫リヤカアを持ちて来る。往復すること四回にて全部運び了る。午食として搏飯三個を食したる后、川崎氏より借りたる家具をリヤカアに積み、返却と移轉の挨拶をかねて川崎氏を訪ふ。放庵君より送り来れる「浮いたか瓢箪」の繪を見る。中々

出来よし。賛に芭蕉の「木枯の身は竹齋に似たるかな」の句あり。玉生氏を訪ひ電球を返却、筍を貰ふ。繊維組合に挨拶の後小谷氏宅に移る。午後は荷物の片付けに従ふ。座敷等趣味よく、矢倉氏の所謂「化物寺」よりここに来れば始めて人間界に来れるの感あり。秋路君来り壁紙を貼る。小谷氏と三人にて「オリ」一酌。夜、八時頃手料理（煤竹粕和へ、全粕煮。独活胡麻あへ、ひじきうま煮、かき玉汁）にて川崎、玉生、秋路氏等を招く。玉生氏より得たる酒一升と「オリ」一杯。小酔。十一時頃就寝。ここは西枕を忌むとのことゆゑ、東枕にて寐る。契月居第一夜。今月は近年稀なる悪しき月なりしもここに移りてよりよき事あらん。来ん月に幸あれ。

\*1 秋路君……「おわら絵」を描く第一人者で板画家の林秋路。「北陸日記」では、昭和二十年三月二十一日に「紙匠林秋路」としてはじめて登場する。

\*2 湯川博士……物理学者・湯川秀樹。湯川は歌を詠み、当時、勇とともに新村出主宰の歌誌「乗合船」の同人であった。京都大学基礎物理学研究所湯川記念館史料室には、吉井勇から湯川秀樹宛てた昭和二十年五月八日付の返礼の葉書が残されている。

\*3 上圍……廁のこと。

\*4 「定本」……昭和十八年に甲鳥書林から刊行した『定本吉井勇歌集』の改訂版。実際の改訂版は、戦後になって、昭和二十二年八月に養徳社より刊行される。

\*5 千葉の父……孝子の父、義父国松喜三郎のこと。

\*6 小杉放庵……画家・歌人。本名国太郎（別号未醒<sup>みせい</sup>）。勇の酒間の友。昭和三年二月、放庵は川崎順二の求めに応じて新作おわら「八尾四季」の作詞を手掛けている。

\*7 正岡……作家・寄席随筆家の正岡容。

\*8 「空白」……後の文脈から考えると、この空白には「オリ」（オリ酒の意）が入るとみられる。

#### 【常松寺仮寓2 小杉放庵の来訪】

勇が『私の履歴書』の中で「暗澹たる日々」とふり返る八尾の疎開生活のなかでも、五月の常松寺での暮らしはとりわけ懐愴を極める。寺での生活に辟易し、早く他の場所に移りたいと懇望しながらも、口利きをした当の川崎氏が首を縦に振らず、移転話は一向に前へ進まない。日記からは次第に苛立ち（憤懣の情）を募らせる勇の様子がうかがわれる。『私の履歴書』で語るところの「人情の酷薄」とは、おそらくこうした川崎氏との仮寓先をめぐるこじれた関係を指すと考えられる。同書には、歌集『流離抄』（昭和二十一年十二月、創元社刊）の歌「あれ寺の鼠寺とも申すべし住むにはよけむ無慙<sup>むごん</sup>なる身は」を引きながら、常松寺での生活が次のように記されている。

「ここでの生活はかなり惨憺たるものであった。何しろ寺のことであるから、葬式の行なわれる時があるが、そういう時には会葬者のために、借りている部屋を明けてやらねばならず、知らぬ他国のことだけに、何処へ往つていいか途方に暮れた。一度、この寺にいる時に、信州の赤倉からわざわざ小杉放庵君がたずねて来てくれたが、その時はち

ようど私は病気で寝ている時だったので、二言三言話し合っただけで別れなければならなかった。」  
友人小杉放庵が常松寺を訪れたのは、勇が病床にあった五月十四日のことである（十七日の朝帰山）。放庵来訪から間もなくして小谷契月居への移転が決まることを考えると、仮寓先に関しても放庵から川崎氏に何らかの取りなしがあったと考えられる。

常松寺を去る前日の三十日、勇は「放庵来」の歌をつくっている（『流離抄』「蓬廬聯吟」所収）。

放庵来うれしと思へど古寺の破れ壁さむく病みて臥し居り  
たまさかに友と相見て杯取らず空しく別るうた寂しも  
友いまもそこにこそ居れ病むわれを憐れむごとき眼差をして

### 昭和二十年六月

八日 雨霽れたれど曇。時々雨来る。七時起。午前、「寒行」に振仮名をす。黙阿彌の「三人片輪」を読む。十一時頃直ぐ前の床屋にゆきて理髪。極めて拙なり。飯りて孝子をして刈り直さしむ。午食、干大根、菜ひたし等。午后、「寒行」の振仮名。「即興詩人」を読み、少年の頃を回顧して、胸自ら緊迫するを覚ゆ。時は過ぎたり。青春再びかへらず。已みぬるかな。今日は花を得ること多し、曰くうつぎ、曰

く菖蒲、曰く芍薬、曰く夏菊。秋江の「疑惑」を読み、この人の在りし日の癡態をおもふ。晩食、鯉生節煮つけ、菜くるみと和へ等。酒一陶。夜、小谷君等と雑談。湯涌温泉行の話起る。所蔵の春宮冊子を見せらる。九時頃就寢。この夜も眠り浅し。

〔右欄外〕×葉書十通ほど書く。

十一日 七時頃起。頭重し。神徒より禪宗に改宗の旨母上手紙。新聞を見るに義勇兵役法案出来上りたる由。六十歳までの由なれば予も又義勇兵の一人ならん歟。老兵何の役に立たむ。午前、手紙を書き「即興詩人」を読む。晴れたれど風出づ。午食、鉄火味噌。午后、郵便局にゆき、歌集「寒行」の原稿、北日本の原稿等を送る。歌をつくる。「学海」のために「高志消息」十五首。「即興詩人」に感動、胸迫らむとす。晩食、平目刺身、鱈味噌漬、鱈煮魚等近來の珍味。小谷氏の得たる酒一升を全氏と共に酌み陶然として酔ふ。夜十時頃就寢。久しぶりにて快眠。

十二日 目覚むれば大雨。七時前起。午前、「学海」の原稿を墨にて書く。近衛公に出状、揮毫を二点にして貰ふ。「即興詩人」讀了。「埋木」を読む。午食、鉄火味噌。午后、歌をつくる。「高志」のための「續々高志消息」中山崎斌へ数首。黙阿彌の「月梅薰籠夜」を読む。雨降りて鬱陶しき日也。晩食、鯖塩焼、焼豆腐うま煮、キヤベツバター焼。酒一陶。夜、小谷氏送り膳を携へ来り冷酒一杯。秋路君来る。紙漉の図持参。鯖を貰ふ。十時近く就寢。熟睡。

〔右欄外〕×「埋木」にも感動せり。この中の一節小学校の

讀本中にありしことを想起して懐旧の情に堪へず。

〔二十日〕晴。句を作らむとすれども一句を得たるのみ。午前、小谷氏座敷の障子を簀戸及び簾マツに換ふ。<sup>\*3</sup>「北日本新聞」の歌の予選。天漸く曇り来る。「江戸東京紙漉史考」を讀み、紙漉の歌を作る時の資料抄記。午食、鮭塩焼、酒粕にて軽く二椀。午后、午睡少時。「彼岸過迄」を讀む。北日本新聞の歌本月の第四回目の選を了す。十五首。夕刻、玉生氏松阪屋の上野正之輔氏同伴にて来訪。東京の惨状をつぶさに聴く。晴れて静かなる夕。晩食、うで玉子二個。夜、秋路氏を訪ひ階上の小室にて語る。飯りて閑談の後九時過就寢。谷本氏より来状、廿四日に中山といへる人来る由。この夜月美し。

〔廿一日〕快晴。七時起。午前、直ぐ前に理髪マユにゆく。十時頃警戒警報出でたるも間もなく解除。一機偵察に来れるらし。<sup>\*5</sup>一洋君より繪到着。一点を小谷君に贈る。午食、あり合せ。午后、零時半頃再び警戒警報出づ。間もなく解除。「彼岸過迄」讀了。愚作也。「四谷怪談」讀了。名作也。三時頃鏡湯へゆき、飯りに郵便局へ寄る。默阿彌の「島千鳥」を讀む。晩食、烏賊焼、菊菜胡麻あへを肴に、小谷氏と濁醪一飲。后塩鯖、かき玉汁にて飯二椀。夜、月明に乗じて小谷氏孝子と三人散歩に出づ。打合橋を渡り高熊村の觀音堂あたりを過ぎ、山吹橋を渡りて飯る。このあたり螢大きくして点々と飛ぶ。四匹を得たり。九時過就寢。

\*1 春宮冊子……漢文白話体の春本。中島棕隠『春風帖』な

どが知られる。

\*2 義勇兵役法……昭和二十年六月二十二日公布、即日施行。本土決戦を見据えて徴兵対象を拡大。十五歳から六十歳の男子、十七歳から四十歳以下の女子に義勇兵役を課し、必要に応じて国民義勇戦闘隊に編入できることとした。

\*3 「北日本新聞」の歌の予選……勇は昭和二十年六月より十月まで、「北日本新聞」短歌投稿欄の選者を務めた。

\*4 「江戸東京紙漉史考」……関義城『江戸東京紙漉史考』昭和十八年十二月、富山房刊。

\*5 一洋君……京都の日本画家・案本一洋まつもと いちやう。

#### 【契月居仮寓 『即興詩人』】

五月末に八尾の民謡詩人・小谷契月（一九〇三〜一九七二）の許（契月居）に移った後、勇の生活は少し落ちつきを取り戻す。紙漉き職人で、おわら絵の板画家・林秋路（一九〇三〜一九七三）との交流が深まるのも契月居に移ってからである。秋路から借り受けた『江戸東京紙漉史考』や秋路作の「紙漉の図」十五図をもとにして、後に、勇は六十二首からなる「紙漉風景」の連作をつくる（『流離抄』所収）。

ちようどこの契月居に移る直前の五月二十七日から、勇は森鷗外の『即興詩人』を讀み始めている（六月十二日読了）。六月八日の日記に記された「即興詩人」を讀み、少年の頃を回顧して、胸自ら緊迫するを覚ゆ。時は過ぎたり。青春再びかへらず。已みぬるかな。」の一節は、ことに印象深い。勇は土佐隠棲時代の隨筆「即興詩人」に、この一篇から「宿命的感化」を受けたと記している。いわば『即

興詩人』は勇にとつて文学への開眼の書であった。また、大正四年には『即興詩人』終盤にある「エネチアの俚謡」（舟唄）——「朱の脣に触れよ、誰か汝の明日猶在るを知らん。恋せよ、汝の心の猶少く、汝の血の猶熱き間に。白髪は死の花にして、その咲くや心の火は消え、血は氷とならんとす。」（「妄想」）——をもとに、「ゴンドラの唄」を作詞している。流離の思いと戦争末期の「明日をも知れぬ命」（三月十三日）という切迫した思いが、帰らぬ日々への懐旧の情と重なって「已みぬるかな」という慨嘆となったのである。このような真率な肉声と六月二十一日の蚩狩に見るような叙情性が、勇の疎開日記を単なる事実の記録にとどまらない味わい豊かなものとしている。

疎開時代前半部にあたる「北陸日記」の最終頁は、蚩狩の翌日二十二日の「富山高岡も早晚危うかるべし」という記述につづいて、二十三日の冒頭二行を記した後で終わる。ノート2「續北陸日記」は、警戒警報の発令を知らせる六月二十三日の「ツヅキ」から書き起こされる。

## 【註】

〔1〕京都府立京都学・歴史館（旧京都府立総合資料館）の吉井勇資料は、勇の長男滋<sup>しげる</sup>氏より寄贈（平成九年五月二十三日受入れ）。

〔2〕細川光洋「人生の残夢春秋——吉井勇『戦中疎開日記抄』解題」並びに『吉井勇戦中疎開日記抄』（翻刻）、「短歌研究」平成二十八年十一月号、93〜99頁。

〔3〕ノートは二冊とも同じサイズ（縦15cm×横19cm）で、実際はB6判よりひとまわり大きく、A5判との間の大きさである。「短歌研究」の解題では「A5判」としたが、本稿ではよりサイズ感の近い「B6判」に改めている。

〔4〕『私の履歴書 文化人1』（昭和五十八年十月、日本経済新聞社刊）所収。初出は、「日本経済新聞」昭和三十二年四月十日〜二十三日。八尾疎開時代については、四月二十日の連載⑩「越中から洛南へ」に書かれている。

〔5〕柴田理恵『台風かあちゃん』（平成二十三年五月、潮出版社刊）第二章「風の盆」と文人たち」に、母須美子から聞いた疎開時代の吉井勇の挿話が紹介されている（51頁）。

〔6〕高志の国文学館刊行の図録『おわらと林秋路——風の盆の画家』（平成二十九年七月、綿引香織責任編集）には、吉井勇の「紙漉風景」六十二首とともに林秋路の「紙漉の図」十五図が収録されている。84〜86頁参照。

〔7〕吉井勇「即興詩人」、初出「報知新聞」昭和九年十二月十五日、「溪鬼荘随筆【1】」。『わびずみの記』（昭和十一年三月、政経書院刊）所収。

## 【付記】

\*本稿は、科学研究費学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）（一般）17K02457）による研究成果の一部である。

なお、本稿執筆にあたって、京都府立京都学・歴史館の大塚活美氏、高志の国文学館の綿引香織氏より、資料提供をはじめとする懇切なご教示・ご助言をいただいた。記して感謝申し上げます。